

令和 2 年度

研 修 集 録



秋田県立羽後高等学校

日々、研修 それは、すべて、生徒のため

校長 永井 元

新入生を迎え新しい年度が始まってまもなく、臨時休業（休校）となった。生徒の学力の保障を第一に、学校以外での学びに工夫を凝らした。自学できる教材の作成、学習支援アプリの有効活用など、生徒の立場に立っての検討が行われた。暗中模索、臨機応変の日々は、見通しを持った研修の毎日でもあった。生徒一人一人に目を配り、それぞれの家庭のIT環境等も考慮して、学校再開後の学びに備えた。生徒は学校の指導方針に沿い、自律に努め、まじめに課題に取り組んだ。臨時休業期間中、事故がなかったことは、生徒が休業の意味を理解した上で行動できた証であるとともに、生徒の指導に教職員が集団として取り組んだ成果でもある。教職員の日々の意識の高さと、場に応じた組織としての日々の研修によってつくられた教育活動が適切であったことをも示した。

休業期間に教員生活で初めての在宅勤務を一日行った。授業をもたない私は、教材研究を在宅勤務の業務にすることができず、思案のあげく、学校の管理運営に関する資料の整理や校務運営の手法に関連した書物の再読に充てた。さらには、5月に予定されているいくつかの会議の資料作成なども行った。在宅勤務時間である8時30分から17時は、時間の流れが遅いことに加えて、さまざまな不自由さをも感じた、長い8時間半だった。自分で作った時間割を一通り終え、自宅で勤務することの難しさと辛さ、そして、心身の疲れを感じながらも、歌が浮かび、詠んだ。

子どもらが いてこそ成り立つ 我が仕事 在宅勤務の 机の寂し

自分を見つめてみる。

人に対し、わかりやすく話し、伝え、理解させ、その上で行動させることが、上手にできない。話も長い。職員に自身の意図や考えを上手に伝えることができずにいることが多く、迷惑にもつながっていると自己嫌悪に陥ることが度々ある。反省するばかりで変化がないのは、成長していないことであり、自信を失う場面はこの2年間、数え切れない。私の新年度の目標は、「話は短く、わかりやすく、簡潔に。そして、わかっているだけ、形にしてもらうこと」である。併せて、「職員会議の校長作成資料も半分にする」ことをこの場で断言する。自身の性格や人間性を変えることは難しいが、やり方は変えられるだろう。やってやれないことではない。やらずにできるはずがない。還暦を控え、心許ないがやってみる。

昨年末のとある日に参加した本校職員のささやかな茶話の会は大いに参考になる。会の進行は、教職員経験30年を超えるいわばベテランの教員であった。その話術に引き込まれ、温かみのある表情、そして、なにより職員の疲れを癒やした楽しいひとときだった。集まった人、「みんなが」楽しめたいわば「ユニバーサルティータイム」だった。私にとっては、これまた研修である。話し方や題材、時間配分など、日常の業務、授業、部活動指導にも活かせることであり、中堅、若手の教員には、そのスキルをぜひとも身に付けていただきたいと願う。

今年度、本校は「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」をテーマに特別支援教育の指導に優れた教育専門監を招き、講話を受け、公開研究授業と研究協議を行った。本校の喫緊の課題の一つに主体的かつ対話的に取り組み、学びを深められていることは大きな成果の一つである。2学期の後半には、互見授業を行い、教員相互の良さを認めながら評価することで、授業改善が一層進むことが期待される。ユニバーサルデザインとは、だれにもわかることを意味するが、一目でわかる板書、一声でわかるねらいなど、互見によって得られたことに、思い切って、挑戦しようではないか。すべては、未来無限の生徒のためなのだから。

目 次

巻頭言

「日々、研修 それは、すべて、生徒のため」

校長 永井 元

目 次

- 1 校内研修（ユニバーサルデザイン・I C T教育の視点を取り入れた授業実践）
 - （1）研修会（プレ研修）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
 - （2）研究授業（実践）協議録・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
・指導案（数学科：佐々木 司）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 2 公開研究授業（ユニバーサルデザイン・I C T教育の視点を取り入れた授業実践）
 - （1）協議録・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
 - （2）感想・指導案（数学科：佐々木 司）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 2
 - （3）感想・指導案（理 科：佐藤 絵里子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 5
- 3 県教育センター研修講座
 - （1）「高等学校新任学年主任研修」（加藤 奈穂子）・・・・・・・・・・ 1 8
「高等学校新任学年主任研修」（桑原 知広）・・・・・・・・・・ 1 9
 - （2）「高等学校新任生徒指導主事研修」（佐川 昌子）・・・・・・・・・・ 2 0
 - （3）「実践的指導力向上研修（高等学校8年目）」（富谷 朋子）・・・・・・・・ 2 2
 - （4）「実践的指導力習得研修講座（養護教諭2年目）」（佐藤 美沙都）・ 2 3
 - （5）「I C T関連研修会」（高橋 潤）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 5
- 4 高等学校教育研究会 参加報告
・数学科（小野寺 裕美子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7
- 5 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスオンライン研修（小松 拓史）・・・・・・ 2 9
- 6 編集後記（研修・図書情報部）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 2

1 校内研修（ユニバーサルデザイン・ICT教育の視点を取り入れた授業実践）

（１）研修会（プレ研修）

- 1 目 的 学習に困難を抱える生徒に対応するため、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の実践を目指し、職員の指導力の向上を図る。
- 2 日 時 令和2年7月8日(水) 15:45～16:50
- 3 場 所 本校 会議室
- 4 テーマ 「ユニバーサルデザインの視点による授業づくり」
- 5 講 師 角館高等学校定時制課程 スペース・イオ 教育専門監 大沢 貴子先生
- 6 次 第 (1) 講師紹介 (教頭)
(2) 講義、演習
(3) 質疑応答
(4) 謝辞 (教頭)
※ 進行：高潤
- 7 内 容 ・大沢先生がパワーポイント(添付 冊子)を使いながら、学習に困難を感じている生徒の視点からその事例の紹介とその困難さを体験した。
- ・ユニバーサルデザインの授業について、板書法など視覚的な注意点を中心に、概要と指導の工夫のポイントを紹介された。
- ・今後増えるであろう学習に困難を感じている生徒に対して、各教科の学習指導要領を参考に、現在の教科指導に特別支援教育の視点での配慮を融合させる有効性を紹介された。
- ・本校の佐々木より、ICTを使った授業を計画中だが、プレゼン用のソフトウェアで良いのがあれば紹介してほしいと質問があった。
- 8 感 想 学習に困難を抱える生徒には、知的な要因や視覚的な要因など、複数の要因があり、指導する教師側がこれらの困難に対応できる指導方法を先立って研修しておく必要を感じた。
- 次の項は、配付資料で注目すべき点が記載されているので振り返り用として要点を記しておく。
- 1) 資料 p.4 では、「発達障害のつまずきと子供に生じるつまずき」の表からは具体的につまずきの分類が読み取れる。
- 2) 資料 p.5 では、授業をユニバーサルデザイン化する方向性が具体的に記載されてる。

- 3) 資料 p.6 では、通常の教科指導に、特別支援教育の視点での配慮を融合することから生まれる有効性と、「個別の配慮」や「個別指導」をするタイミングがわかる。
- 4) 資料 p.7 ～ p.9 には、すべての子どもが「参加できる」指導の工夫が紹介されている。p.8 のスライド番号 15 は重視しているようで、「*コグトレ」を通じて体験・実感した。
- 5) 資料 p.10 ～ p.20 には、すべての子どもが「理解できる」指導の工夫が紹介されている。p.10 の下方にあるスライドの記載事項が正にユニバーサルデザインの授業を象徴していると思われる。授業の「組み立て」「進め方」「発問の仕方」の基本理念となる。

今後、予定されている研究授業に向けて、全教員のモチベーションを下げることなく、各個人が授業で色々実践してみようとする意識の高揚を図るため、呼びかけを継続していきたい。

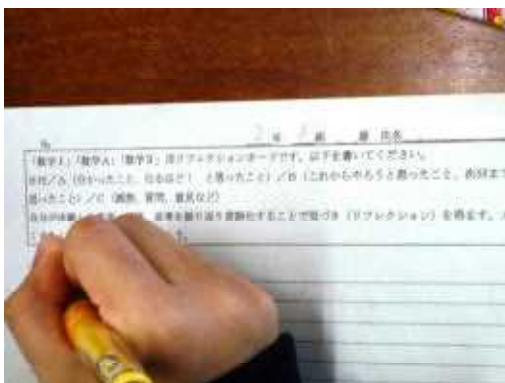
*コグトレとは、認知〇〇トレーニング（Cognitive 〇〇 Training）の略称。

学習面...認知機能強化トレーニング（Cognitive Enhancement Training）

社会面...認知ソーシャルトレーニング（Cognitive Social Training）

身体面...認知作業トレーニング（Cognitive Occupational Training）の3つからなる。

コグトレとは、この3方面から困っている子どもの支援を行う。



(2) 研究授業（実践）協議録

- 1 日 時 令和2年10月14日(水) 14:25～15:10
2 場 所 本校 会議室
3 テーマ 「ユニバーサルデザインの視点による授業づくり」
4 指導者 角館高等学校定時制課程 スペース・イオ 教育専門監 大沢 貴子先生

- 5 次 第 (1) 授業者より本日の授業について
(2) 質疑・応答
(3) 指導助言
(4) 謝辞

参加者 大沢貴子先生、校長、教頭、佐々木 司(授業者)、小川 (教務主任)
千田(数学科主任)、加藤 (1 学年主任) 桑原 (2 学年主任・理科主任)
富谷 (2 A 担任)、司会進行：高橋 潤、 記録：佐藤 絵里子

【協議録】

1 授業者より

- ・生徒に配付したプリントと同じ内容をスクリーンに映すことで、生徒に今どこをやっているか確認できるようにした。
- ・リフレクションカードで生徒の状況を視覚化させた。
- ・プリントの箱埋めにすることで、生徒が取り組みやすいようにし、早くできた生徒は練習問題へ進めるようにプリントをつくった。
- ・iPadのタイマーで時間を視覚化させたが、2画面を映そうとすると、一方が小さくなって見にくくなってしまった。

2 質疑応答

〈千田〉 ・近未来の授業だと感じた。iPadに書き込んでいるのを映し出しているところが素晴らしかったが、それを注目させる工夫が必要だった。張り紙の工夫や添削の丁寧さに感心した。タイマーで終わりを知らせる音が出るともっと良かった。

Q. iPadに書き込んだ文字の色は工夫があったのか。

〈佐々木〉 Ans. 色覚障害の生徒は赤が見えないので、青い文字にした。

〈富谷〉 ・数学が苦手な生徒が多い。昨年度は10名ほどのクラスだったが、今年度は20名ほどのクラスになっており、十分な指導をしてもらえないと感じている生徒もいる。

Q. 視覚障害や脳性まひの生徒もおり、どのような指導法があるか大沢先生に伺いたい。

〈加藤〉 ・十分に考えられた授業だった。プリントと同じ内容をプロジェクターで映すことでどこをやっているのか確認できて良かった。生徒がどこでつまづいているのかを確認するのが難しいのではないかと思った。

〈高橋潤〉 ・黒板の文字の大きさが見やすくて良かった。板書計画がしっかりと練られていた。リフレクションカードの記入をその校時内にやっているのが良かった。視覚障害の生徒は蛍光チョークだと見やすくなることもある。
・気になったことは、プロジェクターから離れたところでiPadに書き込むと、投影

されるまでにタイムラグが生じてしまい、生徒の緊張感が途切れるようだった。また、特に本校の生徒の場合、大切なことはその場で何度か確認することが必要である。

〈教頭〉 ・生徒が今どこをやっているのか確認しやすくなって良かった。大事なこと（消さずに残したいこと）は黒板、流れはプロジェクターと分けているスタイルが生徒たちに浸透しているようだった。

Q. 生徒たちに「わかったか？」でうなずかせてしまっているような気もする。何人くらいわかったら先に進むようにしているのか。

〈佐々木〉Ans. 半分以上の生徒が理解できたら。

・もっと理解できた生徒を増やすためには課題の分量を少なくしても良かったのでは。

3 指導助言

〈大沢〉 ・ユニバーサルデザインについて学んでから授業をしてくれたことが伝わった。

Q. 先生の発言に反応する生徒は4名ほどだったが、その他の生徒に対して指名したりしなかったのは何か考えがあったのか？できない生徒への配慮なのか？生徒が黒板に出て答えるやり方があったのではないか？

〈佐々木〉Ans. 生徒が黒板に出てきて、書く時間がもったいないと考えた。

〈大沢〉 ・3次方程式と4次方程式を一度にやるメリットは何か？別々にやる方法もあったのではないか。苦手な生徒にとっては両方ともわからなかったのではないか。解まで求めることができるようにするためには一つに絞った方が良かったのではないか。

・生徒たちにその都度どちらに注目すれば良いのか、指示があっても良かった。

・生徒のつまずきの原因をはっきりさせて、それぞれの弱点に合わせた配慮をする。視覚障害の中にはテストの丸付けの赤が見えないこともある。太い赤ペンを使うと有効なこともある。タイマーはi P a dのタイマーで十分だった。

・つまずきの原因を分析して次回の研究授業の準備を進めてほしい。

〈小川〉 Q. 定期考査等の出題におけるユニバーサルデザインについて、ご指導いただきたい。

これまでは各教科に任せてきたが、何か配慮すべきことはあるか？

〈大沢〉 Ans. 生徒にアンケートを採るのが良い。問題と解答用紙が一緒の方が良い生徒やゴシックだけだと見づらい生徒などいる。生徒のつまずきを分析して、羽後高校のスタイルを使った方が良い。

4 校長謝辞

大沢先生にはお忙しい中、ご指導ご助言いただき感謝している。UD、ICTについての気づきを与えていただいた。また、発問、回答、展開、共有について改めて考えることができた。各教科への落とし込みのきっかけとなったと思われる。司先生には忙しい中授業をやっていたいただいた。読みやすい指導案が素晴らしかった。今後活かしていきたい。今回の研修会を4週間後の研究授業やその後の授業に是非活かしていきたい。

5 閉会

数学Ⅱ学習指導案

実施日 : 令和2年10月14日(水)
5校時

会場 : 秋田県立羽後高等学校
クラス : 2年A組
学校名 : 秋田県立羽後高等学校
指導者名 : 佐々木 司

- 1 単元名 数学Ⅱ『複素数と方程式』
使用教科書: 最新 数学Ⅱ改訂版(数研出版)
- 2 単元の目標 方程式についての理解を深め、数の範囲を複素数まで拡張して2次方程式を解くこと及び因数分解を利用して高次方程式を解くことができるようにする。
- 3 指導に当たって 本単元は、代数的閉体である複素数を導入することにより、すべての多項式を1次式に因数分解できる良さを学ぶ単元である。数学者ガロアの理論へつながる興味深い単元である。
- (1) 単元観
- (2) 生徒観 男子13名女子9名のクラスである。
おとなしい生徒が多い。基本的な計算など数学の基礎で躓いている生徒が多数見られる。また、色覚障害や脳性麻痺を持つ生徒もおり、インクルーシブな観点を持って指導する必要がある。
- (3) 指導観 本時は「高次方程式」の第1時間目の授業である。因数分解の基本的な公式の習熟や、置き換えをすることで式を見やすくことができるようになることが目標である。
- 本時の学習活動
- (1) 本時の学習目標 (評価規準)
- 本時の目標:
- ① 数学的な見方・考え方
- ・高次方程式を1次方程式や2次方程式に帰着させることができる。
- 【評価規準】
- ・3次方程式を因数分解することで解を求めることができる。
 - ・4次方程式を置き換えをすることにより因数分解できる。
- ② 関心・意欲・態度
- 高次方程式を1次方程式や2次方程式に帰着させることについて、興味をもって考えている。
- 【評価規準】
- ・課題に取り組み、答えを求めようとしている。
 - ・教え合いをして積極的に取り組んでいる
- 課題:
- ・「高次方程式」や「複素数」などは視覚化がしにくく、イメージしづらい分野である。教科書を元にしたプリントでスモールステップで説明をする。また、1枚1枚のスライドの情報量を少なくし、理解しやすくなるように努めた。
- (2) 本時の指導に当たって スライドを用いた説明により基礎事項を理解すると共に、確認問題プリントの問題に対し既習事項を活用して問題解決へ向かう姿勢や、能力を養成していきたい。

(3) 指導過程

{評価の観点・・・①関心・意欲・態度②数学的な見方・考え方③数学的な技能④知識・理解}

	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導入 (5分)	因数分解による 解法	本時の目標と授業の流れを確認する。	
	本時の目標：3次方程式を因数分解することで解を求めることができる。 4次方程式を置き換えすることにより因数分解し解を求めることができる。		
展開 (40分)	因数分解による 解法	例題8 3次方程式 $X^3 - 1 = 0$ を解け。 プリントと、Keynote の解説により学習する。 練習問題19を解く $(1) X^3 - 8 = 0$ $(2) X^3 + 1 = 0$ 例題9 4次方程式 $X^4 + 2X^2 - 8 = 0$ を解け。 プリントと、Keynote の解説により学習する。 練習20 次の4次方程式を解け。 $(1) X^4 - 1 = 0$ $(1) X^4 - 7X^2 + 12 = 0$	・Keynote で説明をしつつ、机間指導を行う。 ・取り組みの意欲を机間指導で確認する。【評価②】 ・問題を解いた生徒は確認問題プリントに取り組むように指示をするとともに、他の生徒との共有を促す。【評価①】
まとめ (5分)		・リフレクションカードを記入して、本時の振り返りをする。	

(4) 本時の評価

評価項目	評価の視点 [判断基準]		努力を要する生徒への支援
	十分満足できる[A]	おおむね満足できる[B]	
数学への関心・意欲・態度	積極的に問題を解き、他の生徒と教え合っている。	問題に取り組み、自力解決しようとしている。	適宜ヒントを与えながら、励ます。
知識・理解／数学的な技能	公式や置き換えによる因数分解による解法を理解し、問題を解くことができた。	・因数分解の方法を理解できた。 ・他の生徒に教えられて問題の解法を理解した。	机間指導をするとともに、学び合いでの解決を促す。

2 公開研究授業(ユニバーサルデザイン・ICT教育の視点を取り入れた授業実践)

(1) 協議録

- 1 テーマ ユニバーサルデザインとICT教育の視点を取り入れた授業実践
- 2 期 日 令和2年11月18日(水)
- 3 全日程 13:00～13:15 受付(於 職員玄関、控室は図書室 2階)
 13:25～14:15 研究授業(2年A組教室、生物実験室)
 14:15～14:40 移動・準備
 14:40～15:30 協議会(会議室 2階)

授業一覧

教科	科目	単 元	学 年	会 場	授 業 者
数 学	数学 II	図形と方程式	2年A組	2年A組	佐々木 司
理 科	科学と 人間生活	身近な自然景観と 自然災害	1年B組	生物実験室	佐藤 絵里子

- 4 協議会 助言指導 角館高等学校定時制課程 教育専門監 大沢 貴子 先生
 司会 高橋 潤、 記録 小松・奥山・佐川

- 1 開会
 2 授業者より感想・質疑応答

佐々木(授業者) 参観ありがとうございました。グラフが出てくるので、視覚的效果としてICTを活用した。ただ教えるだけでなく、生徒から結論を引き出したいと思い、授業をした。ユニバーサルデザインについて、プリントは箱埋めで見やすくした。他にもスクリーンショットの画面活用、授業の流れの提示などを行った。情報量が多くならないよう注意した。「平行」で終わってしまったのが残念です。

佐 藤(授業者) 参観ありがとうございました。ユニバーサルデザインとICT活用ということで、どこまで課題に向き合えるか不安だったが、生徒がうまく取り組んでくれた。もっと生徒の発言や考える時間に割きたかったが、専門分野の授業だったため話しすぎてしまった。ご助言いただきたいと思います。

- 3 協議 グループ発表 (4グループ:M1とM2は数学、S1とS2は理科)

M1グループ

〔良かった点〕

- ・前回に加えて、グラフや動画など視覚的に訴えてわかり易い。
- ・雰囲気良かった。
- ・「生徒の考え」を発表の場面があった。

〔改善点〕

- ・授業全体をICTを活用して進めていく今回の形式では、理解できていない生徒がかくれてしまう一方、できた生徒はどんどん進んでしまう。どこにバランスをおくかが今後の課題ではないかと思われた。
- ・ICT教材を使う目的は分かり易くすることなので、1時間全部使うか、一部にするか、バランスを考えるのも大切だと思う。
- ・手厚いケアが必要な生徒を、授業内でどう指導していくのが適切かを考えなければならない。

M2グループ

〔良かった点〕

- ・黒板に流れが示され、タイムスケジュールが分かり易い。
- ・スクリーンをみれば現在取り組むべき問題がわかる。
- ・生徒自身がお互いに確認し、クラス全体で授業に参加しているところが良かった。
- ・ICT教育についてどう活用していくかをご教示いただき、勉強になった。

〔改善点〕

- ・共有されている反面それに注目できない生徒もいたので、注目を指示する時もあった方がいいのではないか。かなり丁寧な指示が必要な、伝わっていない生徒もいたように見えた。

S1グループ

〔良かった点〕

- ・授業前・授業中のどの時点でも、普段の授業の様子が窺え、大変良い雰囲気だった。
- ・授業内容に沿った最近の写真や、羽後町に関する地図情報など、教科書にない資料が提示されることによって、生徒たちは興味を持ち、身近な課題として授業に取り組むことができたと思う。

〔改善点〕

- ・授業冒頭で、機器が暴走したようで、予定していた映像資料が半分以上流れてしまった。機器が調子が悪いと準備した内容が実施できない、もしくは効果が見込めない状況になるという、ICTの危険な面も実感できた。

S2グループ

〔良かった点〕

- ・スクリーン映像の暴走も授業者の意図かと思うほどいい雰囲気だった。ユニバーサルデザインについて、まず良かった点として次の3点。
 - ①本時の流れが黒板に大きく書いていることで、わかりやすい。
 - ②指示が明確で、生徒がなにをすべきかわかっていた。
 - ③継続的指導が見える内容で、前時の振り返りや和やかな雰囲気など、日頃の指導の賜だった。
- ・各班に配付していた小ホワイトボードで、情報の視覚化ができていた。
- ・スクリーンと黒板の使い分けが分かりやすかった。

〔改善点〕

- ・小ホワイトボードの内容はそのまま掲示できて良かったが、反面、字が小さくてよく見えない班もあった。ここでICTを使用してスクリーンに拡大投射する等、機器を利用できれば良か

ったのではないか。

- ・できれば火砕流を動画で見たかった。
- ・スクリーンの大きさが情報量に対して小さく感じた。情報の精選が必要か。

5 質疑応答

佐々木（授業者） 発達障害のある生徒はどこまで学習内容をわかるものなのか。2時間かけても理解が難しかったこともある。実態把握の例があればご紹介ください。

大沢（助言者） 知的障害についての質問でしょうか？もし、そのテストをしていないとすれば、本時の学習目標②は”全員ができた”が究極の目的なので、個別で教えてもわからないなら、どこがわからないのか探す必要がある。たとえば、分数なのか小数なのか、解き方なのか等。「わかる」「できた」が皆同じレベルではなくても、簡単なものでもわかればその生徒にとっての「わかった」になる。もし九九がわからなくて解けていないなら九九表を提示してもいいのではないかなと思う。

佐々木 九九表が頭に入っていない生徒の場合、努力すれば入るものなのか、それとも入らないものなののでしょうか。

大沢 入らないかもしれない。あと学校の程度によるか。簡単な計算問題からはじめてつまずくところを把握するところから始めたら良い。

高橋 発達障害傾向が強く疑われる生徒がいた場合、その生徒の保護者が認めたがらないことが多い。どう説明し、どのように知らせたらいいのか、どこか相談する団体等があればご紹介ください。

大沢 高校段階の生徒であれば、保護者が小中を通して学校から“何も言われたことが無い”ことはないと思う。

ある発達障害を専門とする医師が「毎年、学年末に我が子の机を学校に片付けにいった。一人でできないことに変だなと思ったが、障害だとは気づけなかった。」という話があります。学校としては丁寧に状況をオブラートに包むようにして優しく説明しているつもりでも、親は言われると言われるほどわからない。家にいるとそんな適応障害はあまりでない。となると学校側として『どこが、何が、将来心配なのかを具体的に話す』ことが必要。明確であればわかるが、ピンポイントでないとわからないし、また受け入れられない。「ここが改善できればこの子は伸びますよ」という視点が大事です。

高橋 ありがとうございます。では質問は以上で終わり、次に大沢先生より指導助言をお願いいたします。

6 指導助言

今日は3回目の訪問となりました。高校においてはなかなか機会の少ないことです。ありがとうございました。授業者の配慮とか意見交換の活発さに感動しました。4グループの発表が全てだと思いますが、私からもう少しだけお話をしたいと思います。

まず数学についてです。授業の構造化がされており、生徒がよく理解している。日々の積み重ねの成果だと思う。ICTの使い方も参考になりました。リフカードもシンプルで書きやすいうようになっていました。特別支援としてはわからない子の支援をいつ、どうするのが気になった。わからない子にどうアプローチするのかという視点が欲しいと思いました。どこでつまづいているのかを分析することが必要です。「生徒全員の理解を求める授業」を目指すのであれば、では、できなかった生徒にどのようにアプローチするのでしょうか。個別指導もあるが、「理解させるには…」を考えるのが大切。個別指導を選ぶなら、その子のポテンシャルを測り、九九まで戻るのか、それが難しいとすれば、授業で九九表を見えるところに貼っておくことが該当する生徒への配慮かと思います。様々なつまづきがありますが、そのつまづきがわかったら、ちょっとしたアドバイスができるようになることが望ましいです。

色覚について、赤は見えていたようでしたが、きみどりや黄色等、使える色についてしっかり分析することが大切です。今後、配慮をちょこちょこすることができれば指導が活きてきます。

ICTはパッと内容が出てきて、時間を節約できるのが魅力です。しかし、ゆっくり書きたいとか、線引きが苦手な生徒がついて行けないようなスピードだとすれば考慮が必要です。ICTを使う効果を見極め、「これを使うと、ここにつながる」という授業作りを進めてください。

次に、理科の授業についてお話しします。“具体的見通し”を持たせる身近な内容でした。最初、黒板に“本時の流れ”のみで半分使われていることに驚きましたが、側面にも黒板があってホッとしました。生徒の反応からも理科が皆好きなんだと感じられました。通常グループで話し合うと話題がズレていくことが多いのですが、それがありませんでした。発問が良かったと思います。全体の雰囲気もととても良かったのですが、Q1（赤ボード）の結果からQ2（青ボード）になるようにするのも面白かったのではないのでしょうか。赤ボードに各グループで書いた「危機」の対策が青ボードに書くというように…。今回の形式も良いですが、各班の赤ボードの内容がばらけていたので、さらに面白くなったかもしれません。

最後にユニバーサルデザインについて。まず学習に参加することが大事ですが、しかし、参加していればいいということではありません。プリントは視覚化、共有化の手段であり、それが「授業の目的」ではありませんので注意が必要です。視覚化は万能のように感じますし、授業の進度に貢献できます。確かに視覚が得意な生徒が圧倒的多数ですが、聴覚や運動が得意な生徒もいます。その聴覚に合わせるために「言葉での説明」が必要となります。例えば、ADHDの生徒は視覚情報が多いと混乱するといわれています。生徒の実態を把握して計画して欲しいと思います。ルーティン化は生徒にとって分りやすいのですが、我々も目の前の生徒の立場にたち、彼らが必要な事柄を考え、次々と指導方法を変化させていかなければならない。結果論的に点数が上がるかどうか、また生徒の満足度・理解度が上がらないといけない。ユニバーサルデザインは目の前の生徒のつまづきにどう対応していくかが大事です。先生方が培ってきた得意な形式で授業したくなるものですが、それが本当に生徒に合っているかどうかという発想の下で先生方自身が変わる勇気をもって臨んで欲しいと思います。

リフカードで「どこがわからなかったのか」という項目がありましたが、本当に分数からわからないのかもしれないので「理解が最も進んでいない生徒をターゲットにする」のではなく、「この子がわかれば、皆わかるかな？」というスタンスで臨んで欲しいと思います。

確かな学力を身につけさせることを目標として、最後の最後に“大村はま”の「裾をもちなさい」（別紙）について触れたいと思います。これはユニバーサルデザインの原点だと思います。分りやすい「ひとこと」が言える教師になって欲しい。自分の経験値を上げていかないと出てこない。自分の引き出しをいっぱいにして、目の前の生徒に向き合っていくという気概を持って今後の指導にあたってください。以上となります、本日はありがとうございました。

7 校長謝辞

大沢先生への御礼の言葉を、感想も交えながらお話ししたいと思います。今年度の研究授業、協議会は「ユニバーサルデザインとICT教育の視点を取り入れた授業実践」です。年度後半からICT教育の取り組みや研修等が入ってきたため、メインはこれまでの「ユニバーサルデザインの視点」であると思います。

先ほど、大沢先生ご自身が「同じ高校に、三度招かれるのは、そう多くはない」とおっしゃっていました。回を追う毎に、本校生徒の様子、我々の指導のあり方を深くご理解いただき、適切な指導助言をいただいたことに感謝申し上げます。たくさんのお褒めの言葉をいただくと同時に課題も見えてきました。これを契機に、今年度後半、そして来年度に向かって進めていきたい。今日抱えている教育課題は様々ありますが、この「ユニバーサルデザイン」「ICT教育」という二つの事柄は、私たちにとって喫緊の課題の一つである。日々研鑽を積み、研修を重ねて向かいたいと思います。私自身のことを考えても、さまざまなことでつまづいていますが、「何につまづいているのか」を明確にすることが重要ではないかと思いました。

本日の協議会で、各グループに共通していた言葉をいくつか挙げてみたい。「情報量」「同時多発」「共有」「指示」「統一と多様」「視覚に訴える」「振り返る」これらのキーワードは、今年度の研修の中で得られたことではないだろうか。

羽後高校で教壇に立つ職員一人一人が、今日の授業と協議会、さらには遡って四月から七か月間にわたる授業実践、教育活動を、さらに深めていくために、今後ともご指導よろしく願いいたします。

本日の研究協議会には、湯沢高校の吉田教頭先生、稲川支援学校の佐々木先生にもご参加いただき、それぞれの視点で我々の気付かないことをご指摘いただけました。本校の様子もご理解いただけたと思いますので、各校に戻られてからも情報共有していただけたら幸いです。



(2) 公開研究授業 (数学科 佐々木 司)

1. はじめに

本年度本校に赴任してきて、まず考えたのは授業の形式であった。研究授業の研究テーマが「ユニバーサルデザイン」および「ICTの活用」であったためその方面から授業改善を考えてみた。

2. 研究内容

(1) ICTの活用について

i P a dを授業で使用した。アプリケーションのセキュリティが最もよいのと、ノートP Cに比べて起動が速いのが利点である。アプリケーションはプレゼンテーションソフトに「K e y n o t e」を利用した。事前にスライドを用意することでテンポのよい授業になることを狙った。

時間の視覚化に「A C T i m e r」を利用した。終了時のサウンドが小さいという意見を公開授業のご意見でいただいた。外部スピーカーも併用するとよりよかったと思う。

グラフのリアルタイムでの変化を見せるために「G e o G e b r a」を利用した。ゆっくりは生徒がこのアプリケーションを自分で利用して、数学的事実に気付けるようになることが目標である。

(2) ユニバーサルデザイン

プリントを利用し、スモール・ステップで学習を進めていけるようにした。また、プリントの内容をそのままプロジェクタで投影することで、今学習しているところが視覚的に分かるようにした。

授業の進行の「解説」、「問題演習」、「まとめ・振り返り」の段階が分かるように黒板の右側に視覚化した。

3. 今後に向けて

計算の表示の仕方は黒板の方がよいなど、公開授業の検討会および感想シートで様々な改善策をご教授いただいた。今年度の研究授業の内容を踏まえ、次年度はICTの活用およびユニバーサルデザイン、そしてアクティブ・ラーニングの観点から授業改善をおこない、更により授業を目指していきたい。



数学Ⅱ学習指導案

実施日 : 令和2年11月18日(水)

5校時

会場 : 2年A組

クラス : 2年A組

指導者名 : 佐々木 司

- 1 単元名 数学Ⅱ『図形と方程式』
使用教科書：最新 数学Ⅱ改訂版（数研出版）
- 2 単元の目標 座標や式を用いて、直線や円などの基本的な平面図形の性質や関係を数学的に表現し、その有用性を認識するとともに、事象の考察に活用できるようにする。
- 3 指導に当たって
- (1) 単元観 本単元は、1次方程式の表す図形である直線について学ぶ単元である。方程式の表す図形を座標平面に表現することで、視覚化できイメージのしやすい分野である。また、数学Aの平面図形は、補助線を引くなど直感がわからない生徒には難しい分野であったが、本単元では適切に座標を導入すると解ける場面もあり、座標を扱うことの良さを実感できる。
- (2) 生徒観 男子13名女子9名のクラスである。
おとなしい生徒が多い。基本的な計算など数学の基礎で躓いている生徒が多数見られる。また、色覚障害や脳性麻痺を持つ生徒もあり、インクルーシブな観点をもって指導する必要がある。
- (3) 指導観 本時は「図形と方程式」の第9時間目の授業である。2直線の平行、垂直について直線の傾きに注目して考えることができるようになるのが目標である。
- 本時の学習活動 本時の目標：
- (1) 本時の学習目標 (評価規準)
- ①関心・意欲・態度
- ・2直線の平行と垂直の関係を、直線の傾きに注目して考察しようとする。
- 【評価規準】
- ・平行な2直線を図示し、それをもとに傾きについての気づきをプリントに記入している。
 - ・垂直な2直線を図示し、それをもとに傾きについての気づきをプリントに記入している。
 - ・教え合いをして積極的に取り組んでいる。
- ②数学的な技能／知識・理解
- 2直線の平行条件および垂直条件を理解していて、それを利用できる。
- 【評価規準】
- ・課題に取り組み、答えを求めることができる。
 - ・「図形と方程式」はグラフによる視覚化ができ、理解しやすい単元である。
- (2) 本時の指導に当たって 本時は数学アプリケーション「GeoGebra」を用いて、傾きが変化したときの直線のグラフの変化を分かりやすく提示していきたい。
- ・教科書を元にしたプリントでスモールステップで説明をする。
 - ・プレゼンテーションソフトを用いて解説する。1枚1枚のスライドの情報量を少なくし、理解しやすくなるように努めた。
 - ・スライドを用いた説明により基礎事項を理解すると共に、確認問題プリントの問題に対し既習事項を活用して問題解決へ向かう姿勢や、能力を養成していきたい。

(3) 指導過程

{評価の観点・・・①関心・意欲・態度②数学的な見方・考え方③数学的な技能④知識・理解}

	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導入 (15分)	2直線の平行条件・垂直条件について	・本時の目標と授業の流れを確認する。 ・プリントを元に2直線の平行条件・垂直条件についての予想を立てる。	・GeoGebraを用いて、傾きの変化によるグラフの変化を見せる。
	本時の目標：平行な2直線の方程式の傾きにはどのような関係があるのだろうか？ 垂直な2直線の方程式の傾きにはどのような関係があるのだろうか？		
展開 (30分)	2直線の平行 2直線の垂直	プリントと、Keynoteの解説により学習する。 練習問題13を解く プリントと、Keynoteの解説により学習する。 練習問題14を解く	・Keynoteで説明をしつつ机間指導を行う。 ・取り組みの意欲を机間指導で確認する。【評価1】 ・Keynoteで説明をしつつ机間指導を行う。 ・Pointの証明は生徒に問いかけながら、スモールステップで進める。 ・問題を解いた生徒は確認問題プリントに取り組むように指示をするとともに、他の生徒との共有を促す。 ・解けない生徒へは机間指導で対応するとともに、周りの生徒に質問するように促す。【評価2】
まとめ (5分)		・リフレクションカードを記入して、本時の振り返りをする。	

(4) 本時の評価

評価項目	評価の視点 [判断基準]		努力を要する生徒への支援
	十分満足できる[A]	おおむね満足できる[B]	
数学への関心・意欲・態度 [評価1]	積極的に問題を解き、他の生徒と教え合っている。	問題に取り組み、自力解決しようとしている。	適宜ヒントを与えながら、励ます。
知識・理解／数学的な技能 [評価2]	2直線の平行条件・垂直条件を理解し、問題を解くことができた。	・2直線の平行条件・垂直条件を理解できた。 ・他の生徒に教えられて問題の解法を理解した。	机間指導をするとともに、学び合いでの解決を促す。

(3) 公開研究授業 (理科 佐藤 絵里子)

1. はじめに

研究授業の協議の観点は次の2点であった。

(1)ユニバーサルデザインを活かすための工夫について

(2)ICT機器の活用と効果について

ユニバーサルデザインやICT機器の活用について、これまで研修等で概要を学んだり、授業参観をさせていただいたりすることはあったが、私自身が1時間の授業の中で特に意識して取り入れるということはあまりしていなかった。今回の研究授業に向けて、ユニバーサルデザインに関する本を読んだり、iPadの活用方法を模索したりしたが、授業にどのように活かせばよいか自分なりの答えがなかなか出せず、直前まで授業のビジョンがもてずにいた。

最終的に、2つの観点を取り入れながら、生徒が実際に身近なところで火山噴火が起きた際に正しい行動をとることができるようにということを一番大事にして授業を行った。

2. 研修内容

(1)ユニバーサルデザインを活かすための工夫について

学習する単元が自然災害を扱うため、事前に生徒たちにアンケートを実施し、地震や火山噴火に関わる心的外傷等がないか確認することから始めた。アンケートの結果、特に心的外傷等を抱えている生徒はいなかったが、事前に把握し、必要に応じて対象生徒に配慮することが必要であると考えている。

今回の実施クラスには文字を書くのに少し時間がかかる生徒もいるため、ワークシートに記入する時間を意識して確保するようにした。また、コミュニケーションをとることを苦手としている生徒もあり、机間指導を適切に行い、必要に応じて支援するようにした。さらに、今何に取り組む時間なのか、生徒が把握しやすいようにするための板書の工夫や火山噴火に関するイメージをもちやすくするため、写真や図、実物の防災グッズなどを提示した。

(2)ICT機器の活用と効果について

プロジェクターで図や写真を提示し、生徒の興味関心を高め、火山噴火は自身の近くでも起こり得るものであることを気付かせたいと考えた。実施教室ではインターネットに接続できなかったために今回はできなかったが、噴火の様子や噴火による被害についての映像で提示した方がより明確にイメージをもつことができた。

3. 今後に向けて

ICT機器を効果的に活用できれば、生徒の興味関心をより引きつけ、生徒の思考力を育成する補助的な役割を担うことができると感じる。しかし現段階では、アイデアをICT機器で実行するための技能が私には足りていない。今後はさらに生徒が自然科学に興味をもち、学んだことを実生活で活かせるよう、生徒の実態に合う配慮や教材の工夫を心掛けて授業を展開していきたい。



科学と人間生活 学習指導案

実施日 : 令和2年11月18日(水)
5校時

会場 : 生物実験室
クラス : 1年B組
指導者名 : 佐藤 絵里子

- 1 単元名 科学と人間生活『身近な自然景観と自然災害』
使用教科書：科学と人間生活 新訂版（実教出版）
- 2 単元の目標 自然景観と自然災害に関する観察、実験などを行い、身近な自然景観の成り立ちと自然災害について、人間生活と関連付けて理解する。
- 3 指導に当たって
 - (1) 単元観 日本列島は、水や緑にあふれ、四季の変化に富んだ素晴らしい景観を与えている一方で、火山噴火や地震、台風などの気象災害が起こっている。日本列島の特徴や身近にも起こっている災害について学び、実際に災害が起きた際にとるべき行動を考える機会にしたい。
 - (2) 生徒観 男子9名、女子10名の計19名のクラスである。理数科目に苦手意識をもっている生徒もいる。おとなしい印象の生徒が多く、積極的に発言する生徒は限られている。一方、課題に取り組む姿勢は良好で、指名して発表させるとそれぞれの考え等をしっかりと述べることができる。自然災害について学び、実際に災害が起きた際に、とるべき行動を考えさせると共に、自分自身や困っている人の命を守ることができるような判断力を身に付けさせたい。
 - (3) 指導観 授業で学んだことを実生活で活用できるようにすることを目標に指導している。興味関心を高めるために画像や映像、実物を効果的に活用できるよう工夫している。また、本科目で学んだ知識から、日常の中でどのように行動すべきか、自身の言葉で表現するよう指導している。
- 本時の学習活動 本時の目標：火山噴火が起きたら、どのようにして命を守るのか。
 - (1) 本時の学習目標 (評価規準)
 - ①思考・判断・表現
 - ・災害リスクを減らすための方法について総合的に判断し、それを表現することができる。
 - 【評価規準】
 - ・予測される危険に応じた対策を考えることができる。
 - ・予測される危険に応じた対策方法を適切に表現することができる。
 - ②関心・意欲・態度
 - ・火山噴火は身近に起こり得ることであることを理解し、災害リスクを減らすための科学的な見方・考え方を身に付けることができる。
 - 【評価規準】
 - ・災害は自身の身近なところでも起こり得ることであると認識し、課題に取り組んでいる。
 - (2) 本時の指導に当たって
 - ・事前に、災害による心的外傷等がないかについてのアンケートをとる。
 - ・プロジェクターと黒板を適切に使い分け、生徒が今何をすべきかわかるよう確認し、授業の終わりに本時で取り組んだ内容を振り返られるようにする。
 - ・防災グッズの実物を提示することで、生徒の思考を促す。

(3) 指導過程

{評価の観点・・・①関心・意欲・態度②思考・判断・表現③観察・実験の技能④知識・理解}

	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導入 (10分)	・羽後町にも影響を与える可能性のある活火山の確認	・秋田県には6つの活火山があること、羽後町でも火山噴火による災害が起こり得ることを確認する。 ・本時の目標を確認する。	・秋田県の地図を用いて、活火山の位置を確認させる。 ・生徒の不安をあおることだけにならないようにする。
展開 (32分)	・火山噴火で起こりうる災害 ・火山噴火で起こりうる災害への対策	・火山噴火で起こり得る災害を考える。 ・班ごとに、挙げられた考えをすべてホワイトボードに記入し、黒板に貼る。 ・班ごとに教卓に並べられた防災グッズを1つ選び、それをどのように利用するのか考える。 ・班ごとに、挙げられた考えをすべてホワイトボードに記入し、黒板に貼る。 ・防災グッズの利用法を発表する。 ・各班の発表を聞き、ワークシートにメモをとる。	・取り組みの意欲を机間指導で確認する。【評価の観点①】 ・様々な考えが挙がるよう、必要に応じて助言する。 ・予測した危険への対策になるよう助言する。 ・生徒の自由な発想を大切にすること。 ・災害への対策を考え、それを適切に表現できているか確認する。【評価の観点1】
まとめ (8分)	・感想の記入	・ワークシートに感想や疑問点などを記入する。	・生徒の疑問点は次回の授業に活かす。

(4) 本時の評価

評価項目	評価の視点 [判断基準]		努力を要する生徒への支援
	十分満足できる[A]	おおむね満足できる[B]	
思考・判断 ・表現	火山の噴出物、噴火などによる災害について深く考え、その対策について適切に表現している。	火山の噴出物、噴火などによる災害への対策を考えることができる。	用語の意味を振り返り、火山による災害を丁寧に説明して、考えさせる。
関心・意欲 ・態度	噴火に伴って起こる災害について詳しく分析し、考えている。	噴火に伴って起こる災害について考えている。	災害の種類を確認し、防災グッズの使い方等を説明して考えさせる。

3 県教育センター研修講座

(1) 高等学校新任学年主任研修

期日：令和2年6月25日（木）

場所：秋田県総合教育センター

内容：＜講義＞ 望まれる学年主任像と学年主任の役割

＜講義・演習＞ 学年経営とマネジメントの基礎

＜講話＞ 思春期の揺れと成長を共に歩む

新任学年主任研修講座に参加して（加藤奈穂子）

1. 研修内容

始めに学年主任の職務や求められる力についてのお話を伺った。学年主任には、経営案等の企画・立案、諸分掌、学年間、学年内の連絡調整、保護者対応など様々な役割があることを学んだ。そのため、「専門的力量」、「チームリーダーとしての自覚」、「教職への情熱、総合的な人間力、人間愛」などの力が求められる。産業界が学生に求める能力は、主体性、実行力、チームワーク・協調性である。充実した社会生活を送るために、高校時代に主体性をもって多様な人々と共同して学ぶ機会を多く提供し、これらの能力を向上させる必要がある。

次に、学校組織マネジメントの基礎についてのお話を伺った。生徒・保護者が何を求めているかを分析し、チームとして力を発揮できるよう努めたいと思った。講師の先生の実際の取り組みを聞いて、今後どのように学年主任として仕事をしていくかを考える上で参考になった。本校は町の支援が手厚く、さらに1年生40名と少人数であるため、きめ細かい指導ができる。この強みを生かして特色のある学年経営ができるよう様々な方策を模索していきたい。

最後に秋田赤十字病院の臨床心理士の丸山先生より、脳から見た思春期の特徴、学校緊急支援とスクールトラウマ、感情の社会化、思春期の課題などについてのお話を伺った。思春期に起こる悩みや問題は、脳の発達のしくみにも起因しているために自然なことなのだと改めて知った。生徒の問題行動も多様化しており柔軟な対応能力が求められる。さらに発達障害型の生徒の特徴や対応方法などの話も参考にして、対応していきたい。

2. 最後に

学年主任として求められる力や、同僚、生徒、そして自らのストレスケアについても学ぶことができた。今回の研修は、ソーシャルディスタンスの関係で、席を空けながらステージに向かって受講するスタイルであった。そのため、グループ活動での情報共有や意見交換などができなかったのは残念だったが、講義の中で様々な経験談に触れることができた。ウイルス蔓延を懸念し、これまでとは違った生活様式が求められている中、生徒、保護者間でも想定外の問題が起きることが予想される。どのような状況の変化にも柔軟に対応する調整力と判断力が求められていると感じる。また、学年内での連携や意見交換を密に行い、学年スタッフのそれぞれの持ち味が発揮されるような雰囲気づくりを心掛けたい。現在1年部には様々な悩みを抱える生徒がおり、どのように良い方向へ導くか日々試行錯誤を繰り返している。この研修で学んだことを振り返り、生徒や保護者に寄り添って共に成長できるように努めていきたい。

新任学年主任研修講座について（桑原 知広）

1. はじめに

担任を13年間務めたが学年主任という立場に替わったことで、「立場、役職が人を変える」というように、例年とは違った緊張感と主任としての役割が務まるのかという不安を感じながら新年度を迎えることになった。今までに関わらせていただいた学年主任の先生方を思い起こし模索しながら、先ずは一年間進めて参りたいと思う。

2. 研修内容

①「望まれる学年主任像と学年主任の役割」

学年主任の職務や求められる力についてのお話を伺った。学年主任には、経営案及び行事等の企画・立案、学校と学年、学年内の連絡調整、学年職員の指導助言などの職務があり、様々な役割を果たさなければならないことを学んだ。そのため、「専門的力量」、「チームリーダーとしての自覚」、「教職への情熱、総合的な人間力、人間愛」などの力が求められる。また、学力の3要素の1つに「主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度」があり、これからの時代を生きていくためには最も欠かせない要素であるということであった。

②「学年経営と組織マネジメントの基礎」

組織の3要素（共通目的、貢献意欲、コミュニケーション）という組織の概念の本質から、学校全体の一部である学年としての組織を経営管理し、経営上の効果を最適化することが「マネジメント」であるなど、学校組織マネジメントの基礎についてのお話を伺った。生徒・保護者が何を求めているか分析し、よりよい学校になるようチームとして力を発揮できるよう努めたいと思った。2学年の在籍数は21名と少人数であるため、きめ細かい指導を心がけながら特色のある学年経営ができるようにしていきたい。

③「思春期の揺れと成長を共に歩む」

秋田赤十字病院の臨床心理士の丸山先生より、脳から見た思春期の特徴、学校緊急支援とスクールトラウマ、感情の社会化、思春期の課題、タイプ別基本対応、教師のストレスについてのお話を伺った。発達障害型の生徒や非適応な言動をする生徒への対応と成長させるコツについてのお話を参考に今後対応していきたい。最後にウィリアム・ウォードの言葉「平凡な教師は言うて聞かせる、良い教師は説明する、優秀な教師はやってみせる、しかし、最高の教師は子どもの心に火をつける」が紹介され、子どもの心に火をつけるという言葉に大変感銘を受けた。

3. 最後に

1学年1クラスなので、生徒に目をかけやすく、学年をまとめ、担任をサポートしやすい環境にある。各学校によってクラスの数と生徒数に違いはあるものの、やるべき内容は同じであるので、学年主任としての役割役目を自覚し、柔軟性をもって学年経営ができるように取り組んでいきたい。今回の研修を通して、感じたこと学んだことを活かし、担任としての目配りをもちながらも、学年主任としての責務を全うしていきたい。

(2) 高等学校新任生徒指導主事研修講座 (佐川 昌子)

1. 高等学校新任生徒指導主事研修講座の日程

I 期

(1) 期日 令和2年5月14日(木)

(2) 場所 秋田県総合教育センター

＊ 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止。

II 期

(1) 期日 令和2年9月18日(金)

(2) 場所 秋田県総合教育センター

(3) 日程 9:30～10:00 受付

10:00～10:10 〈オリエンテーション〉

開講挨拶

10:15～11:15 〈講義〉

生徒指導主事の役割

11:20～12:30 〈講義・演習〉

いじめなど問題行動の理解と校内研修の進め方

13:30～15:05 〈講義・演習〉

事例を通じた生徒理解と対応

15:15～16:15 〈講義・演習〉

特別支援教育における支援チームづくりのために

2. 研修内容

今年度は5月まで新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言期間があり、予定されていた2回の研修講座が内容を変えて9月のII期のみの実施となった。

(1) 〈講義〉 生徒指導主事の役割

この講座では生徒指導主事役割として、校内の連絡・調整役を担うことの大切さ、データから読み取る生徒の現状、校内外の組織的連携について学んだ。とくにデータから読み取る生徒の現状では、高校1年生の中退者について興味深かった。

国立教育政策研究所の「高校中退者調査報告書」の資料から、高1中退者は7月の段階でアンケートで「真面目に授業を受けている」「授業がよくわかる」「学校行事に熱心に参加している」等、8項目が平均値より大きく下降している。対して、8項目以外で否定的回答をしても「真面目に授業を受け」「学校行事に熱心に参加」と回答した生徒は中退しない可能性が高い。さらに、「授業がよくわかる」の項目に肯定的回答をした場合は進級後も中退しない可能性が高い。ここから、授業がわかれば中退の歯止めになるという点が大変参考になり、高校1年生時の1学期の授業、行事を通しての働きかけが特に大事だということがよく理解できた。

また、生徒に働きかける際に、果たすべき役割として校内の連絡・調整があげられた。なにかしらの問題が起きたときの学年部との事実確認等を考えていたが、講義では、高校にお

いて校内に基盤が多く存在し、様々な場面によってそれぞれが生徒と係わりをもつため、この基盤間の連絡・調整が必要だと説明があった。学校内の基盤とは、学級・学年・部活動・委員会等の縦・横・斜めの生徒同士や職員とのつながりを指している。生徒指導をめぐる現況は多岐にわたるが、担任や部活動顧問などの負担や抱え込みが結果的に解決を遅らせてしまう場合が多いことから、情報を多くの教員で把握する必要とのことだった。そのため学校全体で生徒指導を進め、連絡調整役として基盤同士をつないでいく存在としての意識を忘れず、情報共有していくことの大切さを再確認することができた。

(2) 〈講義・演習〉いじめなど問題行動の理解と校内研修の進め方

講義の冒頭で、いじめなどの問題行動については、かつてと違って学校における危機管理の面から、予知センサー能力が必要とされており、とくにその能力を磨くべきだとされるのは管理職・生徒指導主事・学年主任だとされた。「危機管理のさしすせそ」を空欄補充する演習があったが、なかなか埋まらない欄もあり、それが自分に不足している点だと思い、今後は特に気をつけていきたい。

また、いじめアンケートの結果で、具体的いじめの態様が小・中・高校共通で最多は「冷やかし、からかい、悪口、脅し」であるが、2番目になると小・中学校が「軽くぶつかる、遊びでたたく、蹴る」対し、高校は「パソコンや携帯電話等で誹謗中傷」であり、高校だけ異なるのは興味深かった。時として我々周囲の大人が知らないまま、新しい形態のSNSや、その利用法が生徒間では常態化している。どこかのだれかとすぐにつながりを持てる現状をどう理解し、生徒たちがいかに他者とのつきあい方を学んでいくのが課題だと感じた。

(3) 〈講義・演習〉事例を通した生徒理解と対応

生徒の行動を理解するための考え方としてアドラーの目的論が大変勉強になった。

(ア) 人間の行動には目的がある。

(イ) 行動の原因ではなく、その目的を理解しようとする。

(ウ) 人は静止した存在ではなく、常に「なりつつある」ものである。

という観点からみると、生徒の不適切な行動は、目的のための誤った手段ということになる。不登校を例にすると、その休む原因を考えるより、休む目的に焦点をあて、休むことによって本人は何を得られるのか考えることが必要とされる。その目的が「注目を引く」ことなのか、「権力争い」なのか「復讐」・「無気力」によるものなのかで対応が変わってくる。問題の解決にはやはりよく生徒を見、複数で情報を共有することによって、生徒理解をより深めることが大切だとわかった。

(4) 〈講義・演習〉特別支援教育における支援チームづくりのために

今年度、校内研修で学んだ内容と重なる部分が多く、両研修を通して「困っている生徒」への支援をどう学校としてすすめるのか理解を深めることができた。まだまだ担任への負担が集中してしまいがちではあるが、学年部、分掌として分担できるところを外部の専門家の手を借りながら、生徒にとっても職員にとっても、よりよい環境にしていけたらと感じた。

(3) 実践的指導力向上研修（高等学校8年目）（富谷 朋子）

1. はじめに

採用8年目となり、改めて初任者研修や5年経過研修の資料を開いてみた。当時、経験豊富な先生方の授業を尊敬の念を抱きながら拝見させていただいたことを思い出した。自分はこの8年で追いつけただろうか。これからも時折、振り返りながら精進していきたい。また、非常勤講師の頃には経験できなかった担任、分掌業務、部活動顧問、地域連携にも携われるようになり、忙しいながらも新鮮で充実した毎日を過ごしている。その中で出会った多くの生徒や保護者、先生方、地域の方々とのかかわりを通して、人としても、教員としても育ててもらったことに感謝している。

2. 研修内容

(1) 実践的指導力向上研修講座（高等学校8年目）Ⅰ（令和2年6月24日、教育センター）

今回の研修は①不登校の未然防止と対応 ②学校の組織の一員として－自己理解に基づく目標設定－③カリキュラム・マネジメントの3点について研修を行った。①不登校の未然防止と対応では、「ほめると勇気づけるの違い」について考えさせられた。「ほめる」は「他人との競争に意識が向かい周囲の評価を気にするようになる」、「勇気づける」は「自分の成長、進歩に意識が向かい、自立心と責任感が生まれる」とあった。また、不登校の対応について、「原因・結果アプローチ」では被害者・犠牲者意識を与え、「目的・手段アプローチ」では当事者意識を植え付けるとあった。声のかけ方、アプローチの仕方で生徒や保護者の受け止め方が変わってくることを心に留めて接していきたい。

②の「学校の組織の一員として」の研修では、自身の強みと弱みを分析した。先生方の個性や年代による強み・弱みを協働によって補い合っていきたいと感じた。職員同士のコミュニケーションを大切にしたい。

③の「カリキュラム・マネジメント」の研修では、これを上手く回すポイントは、「見える化」「時間のマネジメント」「参画を促すリーダーシップ」「みんなでつくる、やりながら考える（協働性）」であることを学んだ。まずは、自分の担当箇所小さなPDCAサイクルを回し、徐々に周りを巻き込んでいきたい。

(2) 実践的指導力向上研修講座（高等学校8年目）Ⅱ（令和2年9月7日、教育センター）

今回は、他教科の先生方の授業VTRを視聴して助言し合った。上手くいかなかった点について、他教科の先生からアイデアやヒントをもらうことができた有意義な研修だった。家庭科指導主事の部谷靖子先生には、授業構想から指導案の作成まで何度も御助言をいただき、研修を深められたことに感謝している。また、予備知識がある生徒とない生徒の変容を評価する方法として、中学校では授業の最初と途中、終わりで同じ発問について記入させていることを教わった。グループ活動の評価をする際に活用したい。

3. 今後に向けて

生徒や保護者の実態、家庭や地域との連携の在り方、授業や業務の在り方も変わっていく。「今までの経験」に囚われすぎず、柔軟に、新しいことに気後れせずに挑戦していく教員でありたい。

（４）実践的指導力習得研修講座（養護教諭２年目）（佐藤 美沙都）

1 実践的指導力習得研修講座の日程

I 期

- （１）期日 令和２年７月１４日（火）
- （２）場所 秋田県総合教育センター
- （３）内容 「保護者対応と連携」
「学校組織の一員として一学校教育目標と保健室経営一」

II 期

- （１）期日 令和２年９月１５日（火）
- （２）場所 秋田県総合教育センター
- （３）内容 「災害時や事件・事故発生時における心のケア」
「児童生徒理解と人間関係につくり」
「児童虐待への対応」

2. 研修内容

<保護者対応と連携>

保護者との連携には、信頼関係の構築が重要であると学んだ。保護者は学校の状況が見えないため、子どもを見てもらえているのか分からず不安になる。不安が大きくなると不信へと変化し、教員が信じられなくなる。不安が大きくなる前に、教員からの情報開示を行い、学校での様子を保護者と情報共有することで、信頼関係を築くことが大切である。特に行動面で課題を抱えている児童生徒の保護者は、しつこく悩んでいることが多く、子育てで孤立している可能性がある。保護者が子どもを否定的に捉えがちになっている時に、学校での良い面を伝えることで、保護者は子どもを肯定的に見ることができる。

主に担任が保護者と関わることが多いが、養護教諭も生徒と近い存在であり、生徒の様子をよく知る一人である。保護者と直接会う機会があるときは、養護教諭からも保護者に積極的に声をかけ、信頼関係の構築を図るようにしたい。

<学校組織の一員として 一学校教育目標と保健室経営一 >

この講話では保健室経営や学校を客観的に見る方法として、「SWOT分析」を紹介していた。「SWOT分析」とは、顧客志向をベースとして、外部環境「機会O（＋）」「脅威T（－）」、内部環境「強みS（＋）」「弱みW（－）」の４つに分類し、組織の置かれ

た状況の理解や活動の検討を行う方法である。プラス（＋）と分類されるものは保健室経営の特色として、マイナス（－）は課題としてとらえ、保健室経営で何を重要視していくかを分かりやすくする方法であった。学校全体や保健室経営をこの方法で分析することで、課題や目標が見えるようになった。SWOT分析は他のことにも応用が利きそうであり、是非活用していきたい。

<災害時や事件・事故発生時における心のケア>

この講話では「心のケアは相手のセルフケア能力を助ける関わりであり、セルフケアの視点にないものはお節介に過ぎない。」と講師が話していたのが印象的だった。「心のケア」は国際的には「心理社会的支援」と表現し、個人やコミュニティーの回復力を促進させるためのアプローチであると定義されている。相談者自身が自力で解決できそうなものは、どのように解決できるのかを一緒に考えることも「心のケア」だと学んだ。相手の気持ちを受け止め、相手の気持ちに共感だけでなく、セルフケアの観点からも生徒と関わっていくべきだと思った。身体面も精神面も生徒自身のセルフケア能力を高める視点で保健室対応をしていきたい。

<児童生徒理解と人間関係づくり>

児童生徒を理解するための様々な視点を学ぶことができた。一つ目は生徒がとる行動の目的を探る方法である。問題行動は所属欲求を満たすための手段であるが、それ自体が目的となることがある。注目されたいのか、権力争いをしているのか、大人を傷つけ、指導を断念させたいのかを見極め、生徒指導につなげていく方法である。二つ目は児童生徒の特性を捉えることである。発達障害の子どもやその疑いがある子どもはその特性により、学力や対人関係で困難さを抱えている場合が多い。診断にこだわり、障害の有無に注目するのではなく、その生徒の特性を捉え、必要な支援を考えていくことを重視すべきである。

生徒を理解するときには自分の価値観で考えがちになってしまう。しかし、今回の講義で学んだ視点を生かし、生徒を別の角度から見て、保健室からできる支援をしていきたい。

<児童虐待への対応>

秋田県でも虐待の相談は年600件近くあり、虐待の相談件数は年々増加している。心理的虐待（50～60％）が一番多く、次は身体的虐待（20～30％）である。被虐待児の年齢は約80％が小学生以下だが、10％程度は高校生であった。被虐待児には身体的、知的、心理的な影響があり、また体罰で前頭前野の容積が減少し、感情、思考、犯罪抑制力が欠如していく。虐待者も虐待をしてしまう自分を責めたり、経済的に安定していなかったりと、助けを必要としていることが多い。子どもと親の両方を救うためにも早期発見、早期対応が重要である。保健室は虐待に気づくことができる場所でもあるため、虐待も頭の片隅に置きながら対応にあたりたい。

(5) ICTリーダー研修会 (高橋 潤)

1. ICT研修の日程

(1) 令和2年度ICT活用推進リーダー研修会「コア研修」

①日時 令和3年2月10日(水) 9:30~16:50

②場所 秋田県総合教育センター

③内容 コア研修(講義・実習)

・Google for Educationのソフト「My Drive」「Classroom」「Form」「Meet」「Jamboard」
「カレンダー」「チャット」の操作練習

(2) 令和2年度「G Suite for Education」管理者研修会

①日時 令和3年2月24日(水) 13:00~16:00

②場所 羽後高校職員室内(Google meetによるリモート研修)

③内容 アカウントの管理と運用上の管理権限について

2. 研修内容

今回の研修は、講師が遠隔地からリモート機能を使って講習する形式であった。昨今、コロナ禍の影響で、都心部の企業ではこのリモート機能を使った会議等が多く行われているようだが、自身の周りではリモート機能を使って取り組んでいるという話題はほとんどあがっていないので、実際に体験できる良い機会であり、新鮮で興味深い研修であった。

(1)のICT活用推進リーダー研修会「コア研修」では、今後、活用予定のグーグルのソフトウェアを実際に操作する研修。ウェブ上にあるソフトや保存用ドライブを使って操作するため、体感的にはノートパソコンを使っているとは思えないほど軽く動作した。

研修したソフトウェアに共通するのが「共有化」である。複数の人が1つのターゲットに向かい、口頭、文字、画像や動画など、視覚と聴覚を使って互いに意見交換し合えるようになっている。特に「Meet」は、今年度始めに発令された緊急事態宣言における、自宅待機中の生徒達との連絡のやり取りに対して視聴覚的に優れた機能を発揮できたのではないかと想像を駆け巡らせた。まだそれぞれの機能を知り尽くしていないので、活用用途の広がりには判りかねるものの、現況の授業にどれだけ貢献してくれるのかが期待される。

(2)「G Suite for Education」管理者研修会では、前回の「コア研修」で教わった「Meet」を使い、講師、司会、受講者がそれぞれの勤務場所から行う“完全リモート”の研修であった。職員室内で研修できることにSF映画のような近未来的な期待を抱いた。

この完全リモート研修のメリットは、冬季間の降雪と積雪がある中、秋田市まで移動する労力と時間、加えて出張旅費などの財源を抑える観点からすると非常に効果があると思えた。

一方デメリットとしては、初めて完全リモートでの研修を受けて感じたのが、パソコン上の画面で数時間受講していると、①画面から視線を外せないことによる目の負担、②講師の進度に自身が遅れることで、遅れに連鎖ができること、③講師が一方的に進めると、周囲との相談などもできず、単調になり、集中力が途切れやすくなることだと思った。過去に経験があるが、教師の一方的な説明のみの講義形式授業での印象と同じである。

3. 今後に向けて

I C T教育の推進がより具体的になることで、これまでのI C T機器の経験では補えない事が多々あることが予想され、募る不安は否めない。次々と新しい知識と機器の活用能力が求められるのは必須である。そこで、今後の懸案事項として新年度に向けて取り組む事項をあげてみたい。

(1) I C T機器とソフトウェアの研修会

- ①どのような場面でどの機器が効果的に使用できるのかを紹介すること
- ②各ソフトウェアとの相性や効果的な使用例を紹介すること

(2) ネットワーク利用の研修会

- ①「できること」「できないこと」紹介すること
- ②本校のネットワーク利用ガイドラインについての整合性を確認

(3) I C T教育の視点にたった「研究授業」の持ち方

- ①初めての機器とソフトウェアはどのように使えるのか、活用できるかを紹介
- ②研究授業者の選出と今後の継続的な研究授業のテーマをどう設定するのか

ほとんどの教員にとっては「新しい機器」「新しいソフトウェア」であると思われる。この「新しい」に対応しながら、今後の活用を図ることになる。一般的に生徒や若い職員など、年齢が若ければ若いほど「新しいもの」に対する順応力が高いとされている。自身、ガラケーからスマホに変更する時と似た「新しいもの」に対する不安や受け入れ難い心情は否めない。昔から、社会における学校とは「時代の先端を教育する」責務を担う機関である。今年度が始まるとほぼ等しく、緊急事態宣言により全国の学校が休校を余儀なくされた。文科省の報告によると、この全国的な休校期間中に「相互に応答できる」ネットワーク利用は全国で5%程度であり、多くの学校では「相互応答」ができない環境であったようだ。今後、コロナの影響がどのようになるかを読み切れない中、文科省はこれまで以上に「相互応答」型のネットワーク利用を推進するであろう。これまでの授業ではできない効果的な活用を模索したい。しかしながら、今年度「ユニバーサルデザインの視点」で授業を実践する研修でもあったように、I C T機器等のスキルアップに埋没し、本来目指すべき「わかりやすい授業」が損なわれてはならない。「I C Tあって学力向上なし」では本末転倒である。

4 高等学校教育研究会 参加報告 (数学科：小野寺 裕美子)

期 日 令和2年10月29 (木)

会 場 秋田中央高校

第1分科会 <教育課程と指導法>

テーマ：深い学びの実現に向けた指導の工夫

題 名：「効果的な学び直しの実践」 研究発表者：小野寺 裕美子

1. 主題設定の理由

本校生の特徴は、「すなお」、「純朴」、「引っ込み思案」という点である。また、学習面の特徴としては、基礎学力の定着不足が挙げられる。本校では、このような生徒を全職員で一丸となって育成し、活気ある学校にしようと「羽高活性化ビジョン」を掲げている。これは特別活動だけでなく、学習指導においても、一人一人によりそい、基礎・基本を身につけさせることで、「わかって」、「みんなのために」、「ささえる」ことのできる生徒の育成を目指す取組である。

多くの教科担任が、学び直しや指導方法に苦慮している中、私も数学科として基礎学力を定着させる効果的な学び直しの方法はないかと模索してきた。数学の学びを通して、生徒の自己肯定感を高め、本校活性化に結び付けたいと考え、本主題を設定した。

2. 研究目標

本校生は、算数・数学に対して苦手意識をもち続けている生徒が多い。年月をかけて浸透してしまった数学に対する苦手意識を払拭させると共に、効果的な学び直しの実践を確立し、より深い学びを実現させたい。

3. 研究仮説

本校生の実情に合った学び直しの方法を確立することで、より学びを深めることができるのではないか。

4. 研究方法・内容

次のような取組を継続して実践したので、それを紹介する。

(1)「算数・数学復習プリント」の活用

基礎的な計算の確認・学び直しを目的とした復習プリントを毎週末に課題として配付。

また、毎週最初の授業で3分程度の小テストを実施した。計算を苦手とする生徒も学習したことが結果につながるように、復習プリントの中から出題するようにした。

(2)「教え合いタイム」の実施

授業内で練習問題を解く時間を、前半は自分の力で考える時間、後半は友人と解き方や考え方を共有する「教え合いタイム」に分けて実施した。生徒は教室内を自由に歩き回り、学び合いを実践。自分の理解度を友人に伝えさせ、「教えるのも勉強、教えて

もらうのも勉強」という声かけをした。悩んでいるグループには机間指導でアドバイスした。

(3) 「スタディサプリ」(リクルート) の活用

本校では1・2年生を対象にオンライン学習アプリ「スタディサプリ」を活用している。主に、朝学習や家庭学習、長期休業中に国語・数学・英語の問題を宿題配信して利用している。数学では、基礎的な計算問題をゲーム感覚で解かせたり、分からなかった単元や正答率の低かった単元については、動画で学び直しをさせたりしている。休校期間にアプリを利用した学習を進めることもできて効果的だった。

(4) 振り返りシートの活用

単元ごとに振り返りシートを活用し、生徒自身の理解度や学習への取組について評価させた。学んだことや感想を記述させ、教員側としても指導方法の改善に結びつけることができた。単元ごとに実施したことで、生徒からは学習の切り替えができて良かったという意見が多かった。

(5) 授業開始数分間の「謎トレ」の導入

授業の導入部分で遊びを取り入れ、数字や計算に関する謎トレを導入した。遊びを通して数学的なものの見方や考え方を身につけさせることができ、また授業への取り組みも積極的になったと感じている。

5. 研究のまとめ

(1) 研究内容の分析

数学に関するこれまでの取組について生徒を対象にアンケートを実施した。中学校段階までの強い苦手意識は、高校に入学してから多少弱まり、学び直しや振り返りに関して前向きな意見が多かった。研究した取組の中では、「教え合いタイム」が最も好評だった。「聞きにくいことも友人には気軽に聞くことができる」「教える側も勉強になる」「生徒目線の言葉で聞ける」という記述があった。教員からの様々な仕掛けにより、生徒主体の学び直しが効果的であり、「わかって」、「みんなのために」、「ささえる」ことのできる生徒を育成することができると実感した。

(2) 今後の課題

今回の研究は学び直しの実践となった。今後はこれらの取組を継続し、基礎学力の定着につながっているかを、基礎力診断テストやスタディサプリ到達度テストを活用して、検証したいと考えている。

5 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスオンライン研修 (小松 拓史)

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（以下SFC）と羽後高校の交流は、SFCの所在地である藤沢市と羽後町が災害連携協定を結んでいた縁で、2019年度から本格的に始まった。

昨年度実施した1年生対象のSFC宿泊研修は生徒一人ひとりの成長が見られたことから、今年度も昨年同様実施する予定であった。しかし新型コロナウイルス感染症の影響で他県との往来が制限されることとなり、今年度はオンラインではあるが、11月11日～13日の3日間で、予定していた宿泊研修と同じ日程で研修を実施した。

今回の研修の目的

- 1 SFCの授業に触れることで大学を知り、視野を広げる。
- 2 様々な社会課題について考え、大学生の意見も聞くことで関心を深める。

開催方法

オンラインツール「ZOOM」を用い、全国のSFC生と繋いでおこなう。

11月11日（水） 1日目

<日程> 13:25～14:15 始業式・慶應義塾大学教授長谷部葉子先生のお話
14:25～15:15 クラス別自己紹介と履修授業説明

<概要>

開始前に、オンライン留学のしおり、学生証が配付された。長谷部先生のお話から研修が始まり、「独立」や「実学」など、慶應義塾の理念や精神について学んだ。その後、6～7人のグループに分かれてオンラインの大学生と自己紹介をおこない、2日目に履修する授業について説明を聞いた後、履修授業の希望をとった。



スクリーン(右前)に注目して受講する



本物の学生証を手にして雰囲気も高まる

11月12日(木) 2日目

<日程> 11:55～12:30 オープニング・長谷部先生からのお話
13:15～15:15 選択授業

<概要>

選択授業では、6つの授業の中から1つを選んで履修した。選択授業は「withコロナ時代の理想の教室をデザインする」「つくる！考える！ミライの羽後町」など、社会や地域について考えるものが用意された。これまでの羽後学で取り組んできた「自分自身を知る」ことを生かし、自分が社会や地域にできることを考え、発表し合った。



ノートパソコン画面上にオンラインで繋がった大学生が写る



現地在住の大学生(写真中央)をモデレーターにして、オンラインで繋がる大学生と協議する



ワールド・カフェ（席替えする井戸端会議）形式で各グループがアイデアを出し合う



オンラインで繋がったタブレットを前にしてSFC生と意見交換する

11月13日(金) 3日目

<日程> 10:55～12:00 選択授業の振り返り

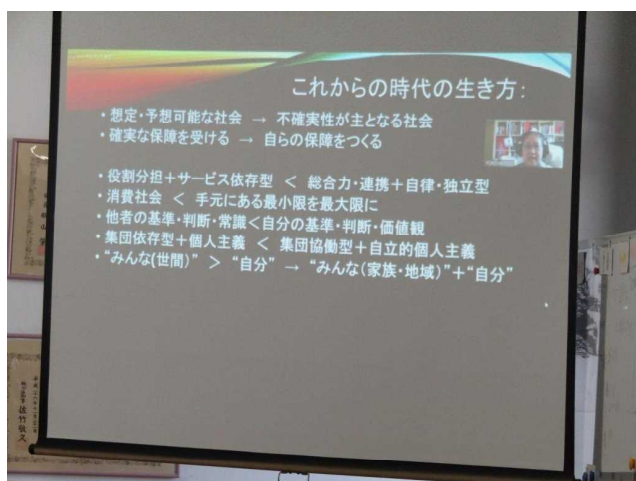
12:10～12:45 修了式



大学生(中央)を司会にして授業を振り返る



リモートの大学生を司会にして振り返る



長谷部先生より、リモート・メッセージがスクリーン上で伝えられる



長谷部先生の講話を聴きながら活動全体を振り返り、今後の地域との関わり合いや、自分の生き方について考える

<感想>

昨年度の宿泊研修では大学生と対面の交流をすることで生徒のコミュニケーション能力も養われていったが、今年度はオンラインであった分、少し生徒の緊張が解けるのに時間がかかったように思う。しかし、大学生の声かけにより研修の後半は活気あるやりとりが生まれるようになった。3日間オンラインでの研修に協力してくれた大学生には感謝の気持ちでいっぱいである。

生徒の実態をよく把握しているのは、我々教員である。しかし生徒の意外な一面や新たな特徴を引き出してくれたのは、「ナナメの関係」を築いてくれた大学生ではないだろうか。慶應義塾大学との交流が、生徒の長所を引き出すものとなることを期待している。

編集後記

多くの先生方より研修の成果を寄稿していただき、令和２年度の「研修集録」を完成することができました。何と言っても令和２年度は「コロナ禍での研修」の印象が色濃く残りました。教育センターでの研修も、「変更」「延期」「中止」が余儀なくされ、受講者だけでなく企画側にとっても大変な年であったと思われます。しかしながら、編集作業中にそれぞれの研修がとても充実している印象を感じ取ることができました。

今年度の研修は「ユニバーサルデザイン」をメインに取り組みました。１学期には“プレ研修”として、大沢貴子先生より「ユニバーサルデザイン」の視点を、講義と演習を通じて指導していただき、本校職員に広く周知することができました。２学期の１０月には、プレ研修の“実践”編として、「ユニバーサルデザイン」に加え、県の推進事業の「ＩＣＴ教育」を追加した校内研究授業を行いました。実際の授業での「ユニバーサルデザイン」と「ＩＣＴ教育」の視点をより体感的に研修することができました。１１月には「ユニバーサルデザインとＩＣＴ教育の視点を取り入れた授業実践」をテーマに公開研究授業を行いました。色々な校種の先生方にも参加していただき、本当に充実した研修になりました。

また、「リモートによる研修」も今年度の際立った特徴だと思われます。本校独自の生徒向けの学習（研修）に「ＳＦＣ研修」があります。コロナ禍の影響で、これまでできていたことができなくなり、一体どうしたらいいのか非常に困っていました。しかし、「リモート」を駆使した活動を実施できたお陰で、生徒たちに少なからず教育的な効果をもたらすことができたと思います。また、教育センター研修においても、２月２４日は「完全リモート」による研修を行いました。まだ課題となることもあるとは思いますが、冬季降雪時では、センターまでの移動に要する労力と時間、さらには出張にかかる旅費などの財源面に関しても有効である思いました。

最後に、今年度はコロナ猛威があらゆる方面に大きな影響をもたらしました。「できない」中でも「できる」ことを、みんなが知恵を絞ってやり抜いた、忘れられない「令和２年度」になりました。これからもさまざまな研修を通じて、知恵を出し合い、より充実した諸活動になるよう邁進していきたいものです。

令和３年３月 研修・図書情報部

令和２年度

研 修 集 録

発 行 令和３年３月

秋田県立羽後高等学校